

はじめに

西 成 彦

言文研では「国民国家と多文化社会」と題して、すでに10回の連続講座を企画し、その成果は紀要における特集や4冊の書物の形で公表してきました。今回は第9シリーズ「複数の沖縄」、第10シリーズ「文化接合の島：台湾」に列なるその第11回目にあたります。この日本列島から南へとずりさがるベクトルは「琉球処分」から「台湾領有」を経て「南進」へと移行していった日本帝国主義の足跡をなぞる形になるわけです。虱潰しというわけには行きませんが、いま太平洋島嶼地域について日本で考えるということは、「大東亜共栄圏」という妄想の再検証であると同時に、敗戦後の日本が戦前・戦中の記憶を手がかりにしながら画策してきた政治・経済・文化的な太平洋支配のありかたの見直しをも視野に入れた批判的な研究でなければならないと思います。

私事になりますが、戦後生まれの私にとって、太平洋島嶼地域への関心は、さしあたり子供だましのテレビ番組が発端でした。小学生時代、私は「ひょっこりひょうたん島」を欠かさず観ていました。そこにはドン・ガバチョという大統領が登場する。四人組の海賊のボスの名前もガラクターで、最近、作者の井上ひさしさんとお話する機会があったのですが「これはカリブ海のイメージですね」という話になりました。アメリカを追われたお尋ね者のマシガン・ダンディーにしても、天真爛漫なサンデー先生にしても、アメリカ色がきわめて強い番組でした。ところがサンデー先生に率いられて漂流を余儀なくされた子どもたちは「日本の子どもたち」のように映る。そこはカリブ海ではなくて、太平洋なのです。パンアメリカニズムを経て、アジア太平洋地域にまで覇権を拡大しつつあったまさに1960年代後半のアメリカを媒介とすることで、カリブ海と太平洋は重なり合っていたのです。キューバ危機とベトナム戦争の二重性といってもいいかもしれません。なるほど海賊ガラクターの一味にはトウヘンボクという名前の中国系の海賊も混じっていました。いまから思えば、サンデー先生に率いられながら、日本の子どもたちはアメリカ帝国主義の前線へと漂流し始めたことになります。私まで含めてです。南進政策を推し進めていた大日本帝国にとっての太平洋が、アメリカにとってのカリブ海や太平洋へとすりかわっていった。ひとことでいえばゴマカシです。しかし、逆にそこからは見えてくるものもたくさんあると思います。

戦前・戦中と戦後、日本と太平洋島嶼地域はどう結びついてきたのか？ 沖縄や台湾について考えてきた私たちはさらに「南」へと身を乗り出して、日本列島の位置を見定めたいと思います。